



**Data**

監督：若松節朗  
 原作：門田隆将『死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発』（角川文庫刊）  
 出演：佐藤浩市/渡辺謙/吉岡秀隆  
 /安田成美/緒形直人/火野正平/平田満/萩原聖人  
 /吉岡里帆/斎藤工/富田靖子/佐野史郎/堀部圭亮  
 /小倉久寛/石井正則/和田正人/三浦誠己/須田邦裕/金井勇太/増田修一朗

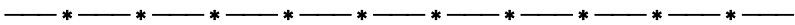
👁️👁️ みどころ

町の中に流れ込んでくる大津波と、福島第一原発建屋の爆発は決して忘れられない風景だ。そんな2011年3月11日の福島第一原発事故から9年。日本ではじめて、あの原発事故と向き合う本格的映画が誕生！

原作は門田隆将の『死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発』。主人公の一人は実名で登場する吉田昌郎（渡辺謙）だが、もう1人、佐藤浩市演じる伊崎利夫の役割は？そして、「Fukushima50」とは？

他方、あの時の政権は？あの時の総理は？中国発の新型コロナウイルス騒動が日本を含む世界中に広がり、パンデミックの危機が現実味を増してきている今、あるべきリーダー像を模索しながら、あの時に起きた日本国のリーダーによる、漫画のようなハプニングをしっかりと反省したい。

もっとも、「2011年3月11日～16日までの衝撃と激動の記録」をいかに映像化するかは極めて難しい。果たして、『キネマ旬報』3月下旬特別号では3人の映画評論家がすべて星1つとし、ポロクソ批評をしているが、その当否は？



■□■あれから9年。初の福島第一原発事故と向き合う映画が■□■

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から既に25年。また、2011年3月11日の東日本大震災からも既に9年が経過する。今年は新型コロナウイルス騒動のため大規模な追悼式典は中止されたが、復興まちづくりは？また、福島第一原発事故の原発処理は？  
 私は、『Q&A 災害をめぐる法律と税務』の執筆者の一員だし、毎年1回大阪大学法学部

でのロイヤリングで『まちづくりの法と政策』を講義しているため、その姿をずっとフォローしているが、「その手の人」は少ない。人の心は移ろいやすいものだ。もっとも、人間はそうだからこそ、つまり悲しいことを忘れられる動物だからこそ、生きていけるわけだが・・・。

私は、「戦後75年」の節目となる2020年5月に『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』と題する本を出版する予定だ。「アウシュビッツの悲劇」から既に75年を経ているが、「ヒトラーもの」と「ホロコーストもの」の映画は毎年のように名作を輩出している。直近では、『ジョジョ・ラビット』(19年)と『名もなき生涯』(19年)だが、「東日本大震災モノ」は？園子温監督の『ヒミズ』(12年)、『シネマ28』210頁)や『希望の国』(12年)、『シネマ29』37頁)、さらに、キム・ギドク監督の『STOP』(17年)、『シネマ40』265頁)や、廣木隆一監督の『彼女の人生は間違いじゃない』(17年)、『シネマ40』272頁)等がそれだが、これらはすべて東日本大震災や福島第一原発事故を真正面から描いたものではなく、「ある1つの側面」に焦点を当てたもの。東日本を襲ったあの大地震と大津波によって発生し、「福島第一原発を放棄した場合、避難範囲は250km、避難対象は5千万人。首都圏だけでなく、東日本は壊滅」とまで言われたあの原発事故を真正面から描いた映画は、本作が初だ。

原作は門田隆将の『死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発』。そして、主人公は福島第一原発所長の吉田昌郎(渡辺謙)だ。過去、『沈まぬ太陽』(09年)、『シネマ23』168頁)、『空母いぶき』(19年)、『シネマ45』62頁)等の社会派問題作を発表してきた若松節朗監督は彼1人だけを実名で登場させたが、その狙いは？あれから9年を経過した今、そんな本作は必見だ。

## ■ ■ 「Fukushima 50」とは？ v s 真田十勇士！ ? ■ ■

松方弘樹が真田幸村役を演じた『真田幸村の謀略』(79年)は、『柳生一族の陰謀』(78年)、『赤穂城断絶』(78年)に続く東映大型時代劇の第3弾として公開された大作で、霧隠才蔵、猿飛佐助ら真田十勇士の活躍を描き、最後には徳川家康の首が空中に舞い上がるというメチャ面白い映画だった。しかして、本作のタイトルになっている「Fukushima 50」とは一体ナニ？

福島第一原発事故を真正面からテーマにした本作には、あの原発事故によって私たちがはじめて知った①圧力容器や格納容器、②制御棒や燃料棒、③放射線量や冷却水、汚染水等の言葉が登場する。また、本作最大のポイントとなる④ベント(格納容器内の圧力上昇を緩め、容器の破損を回避する方法)やメルトダウン(圧力容器内に封入された燃料棒が自らの熱で溶解することで、圧力容器や格納容器自体をも溶かし、原子炉外に流出する現象)という難しい言葉も登場する。それらは、パンフレットにある『「Fukushima 50」を読み解くためのキーワード』の中で3種類のカテゴリーに分類して解説されているので必

読だが、要は、私たちがテレビ画面でハッキリ見た、1号機原子炉建屋の爆発事故と同じことが次々と起きれば福島はもちろん、首都圏だけでなく東日本全体が壊滅するということだ。

そんな状況下、本作の主人公になるのは、原子炉から最も近い中央制御室で指揮する1・2号機当直長の伊崎利夫（佐藤浩市）と、大地震の発生後直ちに緊急時対策室に移動し本部長として現場全体を指揮する吉田昌郎の2人だ。3月11日に発生した福島第一原発事故の復旧作業や応急処置のために働く従業員は約800名だったが、3月15日には原子炉4号機の爆発と火災が発生したため、吉田は「万事休す」と判断し、そのうち750人を避難させたが、吉田と伊崎を含む約50名は、なお現場に留まった。そのため、欧米など日本国外のメディアが彼らに与えた呼称が「Fukushima 50」だ。真田十勇士はそれぞれ一騎当千の強者だったが、さて「Fukushima 50」の面々は？

## ■□■時の政権は？時の総理は？彼はあの時どんな動きを？■□■

去る2020年3月7日（土）、BS1スペシャル『独占告白 渡辺恒雄～戦後政治はこうして作られた 昭和編』は、読売新聞グループのトップ、渡辺恒雄氏（93歳）への独占インタビューを放送した。インタビュアーは大越健介だ。「昭和編」となる今回、70年にわたって日本政治の実像を見つめ続けてきた渡辺氏は、吉田茂政権から中曽根康弘政権に至るまでの戦後日本の歩みについて、その知られざる舞台裏を、派閥の領袖たちの激しい権力闘争の虚実、日本外交の秘史、証言ドキュメント等を交えて赤裸々に語っていた。

1951年にサンフランシスコ講和条約を締結した吉田茂首相は、その後、日米安全保障条約を軸に軽軍備、経済重視の方針を確立させた。これによって、以降の日本は「自社対決」という構図の中で、1993年の細川護熙連立内閣を例外として自民党の単独政権が続いてきた。しかし、細川連立内閣で失敗した後も水面下で動いていた小沢一郎の執念と、自民党の失政に伴う「政権交代」の声が高まる中、遂に2009年8月30日の総選挙によって、自民党から民主党への日本初の「政権交代」が実現した。その初代総理が鳩山由紀夫。その1年後に登場したのが、市民運動の活動家だった菅直人総理だ。そして、神サマは何の因果か、民主党の菅直人総理の時に東日本大震災が発生させ、また福島第一原発事故を発生させた。

そんな日本国の緊急事態の中、時の総理はいかなる動きを？

## ■□■思わずバカヤロー！しかし、そのホントのお相手は？■□■

2011年3月11日14時46分に東北地方太平洋沖地震が発生。15時36分、1号機建屋で水素爆発が発生した。そんな状況下、政府は15時42分、原子力災害対策特別措置法第十条を宣言し、16時36分、原子力災害対策特別措置法第十五条を宣言し、政府は現場と密接な連絡を取りながら緊急の対策に乗り出した。その最前線になったのは、

政府（官邸）は内閣官房長官であり、東京電力本店は緊急時対策室総務班の小野寺秀樹（篠井英介）だった。

渡辺謙と佐藤浩市といえば、役所広司と並んで現在の邦画界を代表するトップ俳優だが、本作導入部では、その二人を中心に大地震直後の現地（現場）での奮闘ぶりが描かれる。そんな中、3月12日6時20分、急遽「総理が現地を訪れる」との連絡が吉田に伝えられたから、吉田はビックリ。こんな時に総理に来てもらっても、何の意味もない。いや、ハッキリ言えば、その対応をする余裕もないのだから、来てもらうだけ迷惑だ。それが吉田の正直な気持ちだったが、さて彼は総理にどう対応するの？また、吉田は福島第一原発の所長だが、同時に東電の社員。したがって、立場的には緊急時対策室総務班の小野寺の方が上だから、「これは命令だ！」と言われれば、それに従わざるを得ない。しかし、現場の実態を知らないまま矢継ぎ早に勝手な指示を繰り出す小野寺に、吉田はうんざり。

ある時彼は思わず小野寺に対して「バカヤロー！」と叫んだが、それは吉田の本心の発露だ。しかし、それを叫びたかったホントのお相手は・・・？

## ■□■危機の時こそ浮き彫りになるリーダー像は？■□■

今年1月から顕在化した新型コロナウイルス騒動は、2020年3月10日現在収まることを知らず、全世界が混乱に陥っている。そんな時期の日本のリーダーは、戦前戦後を通じて歴代最長の総理になった安倍晋三だ。しかし、そんな今、彼のリーダー像は如何に？が大きく問われている。しかし、ハッキリ言って、あの時の、あの総理の対応は酷かった。多くの国民はそう思っているし、原作者も明確にそんな認識で原作を書いている。さらに、産経新聞の論説委員の阿比留瑠比の立場は昔から明確だが、本作の試写を観た彼は、2019年10月31日付「フクシマ50が描く『総理』像」でその点に焦点を当て、「我が意を得たり」とばかりに本作のセリフを書き連ねているので、それを紹介しておきたい。

映画ではあえて氏名を伏せて登場させている総理の印象的なセリフは次の3つ、すなわち、①「何で俺がここに来たと思っているんだ。こんなことをやっている時間なんてないんだ」、②「バントを何で早くやらないんだ」、③「撤退したら、東電は百パーセントつぶれる。逃げてみたって逃げ切れないぞ」。その上、彼は「映画の『総理』は、筆者が見聞きした実像からみればまだ温和だった。」と書いているから、きつい。そんな彼のまとめは、「ともあれ、あの『悪夢』をきちんと記憶し、後世に伝えるためにも、映画館に足を運ぶ価値はあるだろう。」だから、そんな彼の思いをしっかり受けとめたい。

もちろん、民主党の支持者はこんな記事を読めば不快になるかもしれない。また、当時の状況をリアルタイムで固唾を呑みながら見守っていた多くの日本国民の中にも異議を唱える人がいるかもしれない。しかし、私はハッキリ言って原作者の立場を支持するし、本作と同じ立場だ。

## ■□■避難指示は？こりゃ戦力の逐次投入？その当否は？■□■

東北地方太平洋沖地震の発生は3月11日の14：46。津波の到来、各種の法的措置と宣言、記者会見等を経て、住民への最初の避難指示の発令は、①3月11日20：50に福島県が出した半径2km圏内の住民への避難指示だ。その直後には、②21：23、日本政府による、半径3km圏内の住民への避難指示と半径3～10km圏内の住民への屋内退避指示の発令が続いた。さらにその後、③日本政府は12日5：44、半径10km圏内の住民に避難指示を発令、④日本政府は12日18：25、半径20km圏内の住民に避難指示を発令、⑤日本政府は15日11：00、半径20～30km圏内の住民に屋内退避を発令、と続いた。その詳細は前述の「2011年3月11日～16日の衝撃と激動の記録」のとおりだが、連日テレビ画面にくぎ付けになっていた私たち国民もその大筋は理解できていた。そして、それらについて、一方では状況に応じて避難指示の範囲が拡大するのは仕方ないと思いつつ、他方ではこんな「戦力の逐次投入」でいいのかなど思っていた。

若松朗監督は本作のスクリーン上に、次々と発令される避難指示に困惑しながらもそれに従って動く被災住民の姿を映し出していく。といっても、焦点を絞らなければならないため、そのメインは伊崎の妻・智子（富田靖子）や娘・遙香（吉岡里帆）たち。そして、ホンの少しだけ避難住民として、前田かな（中村ゆり）や松永（泉谷しげる）も登場させ、事故現場で不眠不休で働く「Fukushima 50」の面々と避難指示に従う家族たちとの「関係」を見せていく。そこでは、各自が家族と電話で話したり、メールを交換する余裕自体がないため、「決死隊」の編成やその決行等の動きが伝えられることはなかったが、家族の不安が募っていったのは当然。そのため、本作ラストに登場する、伊崎と伊崎の家族との避難所での再会は大きな感動を呼ぶシーンになっている。

しかし、私たちが考えなければならないのは、ホントにこんな避難指示でよかったの？ということだ。当初の津波被害による退避の範囲を、福島第一原発の建屋の水素爆発によって大きく広げなければならなくなったのは仕方ないが、ホントにこんな「戦力の逐次投入」でよかったの？

## ■□■「決死隊」を含めて現場を賛美しすぎ？キネ旬の星は？■□■

日露戦争で旅順の攻略に苦勞した、乃木希典率いる日本陸軍は、「白樺隊」と名付けられた「決死隊」を組織したが、当時の機関砲という新兵器の前に日本兵はバタバタと倒されていった。また、太平洋戦争の敗色が濃くなる中、「神風特別攻撃隊」がはじめて編成され、攻撃に向かったのは1944年10月20日。その最初の編成は26機（うち、体当たり13機）だった。しかして、本作でもそれと同じように（？）ベント作業のために、2人一組の「決死隊」計6名が次々と、高い放射線量を示し、いつ爆発するかもしれないという危険のある1号機と2号機の中に突入していく姿が描かれるので、それに注目！ちなみに、

総理直々の視察のお相手をさせられた吉田は、総理からの質問に一つ一つ手際よく説明していたが、ある時、イライラを隠せないまま、「やれることは全部やっています！決死隊を組織してまでやっています！」と答えてしまったが、それに対する総理の反応は・・・？

他方、本作は『沈まぬ太陽』『空母いぶき』に続く若松節朗監督の社会問題提起作だから、映画評論家諸氏もそれなりに高評価！私はそう思っていたのだが、意外にも『キネマ旬報』3月下旬特別号の「REVIEW 日本映画&外国映画」によると、3人の評論家がすべて星1つでボロクソコメントをしていたからビックリ！興味深いので、あえてそれを転記すれば次のとおりだ。

- ①「見るうちに無能な上官に翻弄されつつ自己犠牲の精神を発揮する部下を前線に送り出す板挟みの存在の悲憤を描く戦争大作めいてきて」（川口敦子）
- ②「この作品は検証や哀悼や連帯ではなく、動揺や怒りや対立を呼びおこす。」（佐野亨）
- ③「佐藤浩市と渡辺謙を真ん中においた悲壮演技の応酬が、ウソだと思えてならなかった。」「政治的意図とヒューマニズム、どちらも安手の二つが手を組んでいる。」「何を隠蔽したいのか。若松監督、承知の上の職人仕事か。」「知るべきことがここにあるとする人もいようが、2020年に見るべき作品にはなっていないと私は考える。」（福間健二）

私はこんな評価には賛成できず、『沈まぬ太陽』や『空母いぶき』とともに、「あれから9年」の今、日本国民のすべてが観るべき映画だと思うのだが・・・。

## ■□■最悪の事態は発生せず！これは天佑神助？■□■

本作のパンフレットには、「2011年3月11日～16日の衝撃と激動の記録」があるので、それは必読！これは、去る2月23日のNHK BS1で放送された『全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る～』で見たのと同じように、①日本政府・福島県・東電、②福島第一原子力発電所（イチエフ）、③緊急時対策室・中央制御室が、それぞれ分刻みで、いかに動いたかを記録した重要資料だ。もっとも、現場で不眠不休で働いていた吉田と伊崎、そして「フクシマ50」の面々にとって、それはあくまで結果に過ぎない。しかして、1号機建屋の水素爆発、4号機建屋の水素爆発に続いて、2号機建屋でも爆発が起きれば、東京を含む東日本は壊滅！そんな最悪の事態を覚悟した日本政府は、3月15日11時00分、半径20～30km圏内の住民に屋内退避を発令したが、翌3月16日11時25分には、2号機格納容器内圧力は大気圧と同程度まで低下し、4号機燃料プールに冷却水が残っていることも判明した。それは一体なぜ？それは今でもよくわかっていないから、1200年に日本を襲った蒙古の大軍が、台風によって一夜にして海の藻屑と消えてしまったのと同じような、天佑神助？

それはともかく、幸いにも2号機建屋の爆発事故が起きなかったおかげで、東京を含む東日本全体の壊滅を免れることができた。その結果、吉田が食道ガンで亡くなった2013年の春も、伊崎のふるさと・富岡町では、今年も満開の桜が咲き誇っていた。私は竹内

まりやが50歳になった時に作り、自ら歌った『人生の扉』が大好き。とりわけ、その二番の歌詞である「満開の桜や色づく山の紅葉を この先いつたい何度見ることになるだろう」が大好きだが、本作ラストを見ていると、その時点でなお生き残り、故郷に咲き誇る満開の桜を見ることができる伊崎の幸せ感を実感することができる。もっとも、前述のキネ旬3月下旬特別号で、川口敦子氏はその点についても、「しかも結局、責任の所在をうやむやにしたまま満開の桜に涙する、まさに戦後日本への道をなぞり、迷いなく美化するような展開に呆然とした。」と批判している。しかし、そもそも、あの福島第一原発事故で、「責任の所在」など一体誰が明確にできるの？本作ラストのスクリーン上に見る満開の桜を、「貴様と俺とは同期の桜」と歌われた、あの軍歌の桜と同じようなものと、変に勘繰る方がおかしいのでは？

## ■□■あれから9年。同じ3月11日にパンデミック宣言が！■□■

「あれから9年後」の2020年3月11日、世界的に広がり続ける新型コロナウイルスについて、ついに世界保健機関（WHO）は「パンデミック（感染症の世界的な大流行）とみなすことができる」と表明した。しかし、ハッキリ言って、これも「戦力の逐次投入」ではないの？

あれから9年後の今、被災地の鉄道は今月すべて復旧し、福島の JR 常磐線富岡―浪江駅間は14日には運転を再開する。昨春の復旧後、台風で再び被災した岩手の三陸鉄道リアス線も20日に全線運行再開となる。しかし、3月に避難指示が一部解除された双葉町や大熊町でも住民の帰還意欲は低く、「戻らないと決めている」と答えた住民が6割にも上っている。また、原発の汚染水を浄化処理したトリチウム水は、最終処分方法が見つからないまま溜まり続けている。先般、政府の有識者会議が、薄めて海に流す処分を最有力視する報告書を3年がかりでまとめたが、どこでどう処理するかは具体案には踏み込めていない。また、政府が管理して汚染土を保管する中間貯蔵施設も広がり続け、その広さはざっと東京ドーム340個分に上っているが、その最終受け入れ先は決まっていない。さらに、原発の廃炉によって出る放射性廃棄物や溶け落ちた核燃料の処分方法の検討も進んでいない。

他方、WHO のパンデミック宣言を受けて、3月12日の株価は大暴落。トランプ大統領からは遂に「無観客試合になるくらいなら」との前提付きながら「東京五輪は1年間延長したほうがいいのではないか」との発言まで飛び出してきた。そんな直近の状況下、新型コロナウイルス騒動と対比しながら、本作によって「Fukushima 50」の面々の奮闘ぶりを確認し、今後の行動の1つの指針としたい。

2020（令和2）年3月13日記